連載　第73回

福聚山史

文　池浦泰憲

文人「大田南畝」と常圓寺

●「便々館湖鯉鮒狂歌碑」

門前にある「便々館湖鯉鮒狂歌碑」をお寺へ参拝する方は一度は目にしたことがあるだろう。

この歌碑を目あてに訪れる人もあり、広く知られているようである。

江戸時代中期、便々館湖鯉鮒（一七四九～一八一八）によって詠まれた狂歌（和歌の形式に卑俗滑稽な内容を盛った歌）を、親交があった大田南畝（蜀山人）が揮毫し、それを石に刻んだものがこの歌碑である。

●著名な揮毫家としての南畝

大田南畝（一七四九～一八二三）は、朱楽菅江・唐衣橘州とともに江戸の「三大狂歌師」の一人といわれた人物である。狂歌師のほか戯作者・漢詩作者・考証随筆家でもあり、蜀山人と号し、滑稽を主とした漢詩体の「狂詩」には「寝惚先生」と称した。

南畝の名が著名となると、彼の書が価値を持つようになった。その書を求めて江戸以外からの依頼もあり、時には書いた記憶のない神社の扁額を九州で本人が目にすることもあったという。

ある正月に南畝が口にした「**又ことし扇何千何百本　かきちらすべき口びらきかも**」とは、「いったい今年は何千何百本扇を書かなければならないのだろう…」と、揮毫に明け暮れるであろう一年を憂う言葉である。

その依頼の多さは、本人公認の代筆屋・亀屋文宝という人物がいたほどで、南畝は「文宝の字は奇麗だが、私の本当の書はきたない」と言っていたという。また、依頼の内容や、依頼者の教養などに応じて、依頼を上・中・下と分け、「**上は速やかに書くべし。中は預かり置いて書くべし。下に至りては書くべからず。**」という対応をとったというが、上には「**一至て美人の直頼み、（美しさが）中ぐらゐ（位）にては不承知なり。又頼み（仲介者のある）の依頼にては受けとらず**」などいう基準もあった。

便々館湖鯉鮒狂歌碑

こうした上中下の基準は部屋に壁書として掲げ、最後には「**此外いやな事だらけにして、見る目もうるさき事多し。あたら光陰を費やして欲深き者の目を悦ばしむるにしのびず**」と、南畝の目に依頼者は「欲深き者」と映り、彼らを悦ばすために「光陰」（時間）を費やすことを相当な苦と感じていたことがうかがえる。果たして便々館の狂歌の揮毫を南畝はどのように感じていたのであろうか。

●桜を愛でる

南畝はれっきとした武士であり、幕府の役人であった。したがって役人としての本業をこなしながら多くの分野で活躍した。その多忙な日々の中で、江戸の四季折々の季節を楽しみ作品を残している。特に春の花見では桜が好きで、ある年の南畝の行動を見てみると、14日間ほどの間に、上野・根岸・向島・飛鳥山・深川・大久保・品川と連日各地の桜を観に出かけている。現在、上野公園に石碑がある「**一めんの　花は碁盤の　上野山　黒門前にかかる白雲**」の狂歌は、上野の桜を詠んだものである。

●常圓寺の桜を詠む

南畝が詠んだ狂歌は二千とも三千ともいわれる。その一方で南畝は本来漢詩を志向していたといい、生涯を通じて作り続けた。南畝と親しかった戯作者の平秩東作は「詩才も比類なき上手なり」と評している。

その残された漢詩の中で、常圓寺の桜を詠んだ漢詩が、寛政元年（一七八九）と文化五年（一八〇八）の二首ある。その内の文化五年三月に「常円寺に花を見る」と題して詠んだものは次のような詩である。

新亭西に指す一孤村　独樹春陰膽蔔園
嫋々として枝を垂る千万朶、細かに看れば瓔珞珠を綴ねて繋し

（原文は漢文体）

「西に指す一孤村」とは常圓寺のある成子の地を指す。「膽蔔」とは、西域の香りのよい名花という意味である。寛政元年の南畝の漢詩には「門に膽蔔園の字を掲ぐ」とあり、当時、常圓寺の門には「膽蔔園」と書かれた額が掲げられていたようである。境内には芳しい花の香りが漂っていたのであろうか。

その中で「嫋々」と長くしなやかに枝を垂れた「千万朶」とは、「江戸三大桜」ともいわれた常圓寺の枝垂れ桜のことと思われるが、そのたくさんの花を細かにみると、そこには珠を連ねたように花が咲いていた。その姿を「瓔珞」（寺のお堂や仏壇を飾る荘厳具）に例えたのであろう。

残念ながら当時南畝が目にした枝垂桜とは代が変わってしまったが、間もなく花開く桜を、南畝が愛でる姿を想い浮かべながら観賞してはいかがであろうか。